

質問

形象埴輪の出現時期について 埴輪のうち形象埴輪が出現した時期について、その種類の違いなども含め具体的に解説して下さい。

[回答者] 丹羽野 裕

一 形象埴輪とは

古墳の外面に樹立された土製の工作物を埴輪と呼んでいます。埴輪は大きく分けて円筒埴輪と形象埴輪の二種類に分類されています。円筒埴輪は筒抜けの円筒形で、外側にタガと呼ばれる突起が数条めぐり、円形（長方形や三角形のものも古式の埴輪にはみられる）の孔（透かし）が開けられているのが一般的です。実はこの円筒埴輪の起源をたどっていくと、弥生時代後期後半（二世紀～三世紀前半）に吉備地方を中心に用いられた特殊器台と特殊壺にその源があることが分かっています。これらは墳墓の祭祀で使われる器を載せる大型の台と装飾された壺で、古墳時代初期（三世紀後半）にはまだ特殊器台の特徴を残したものも多く、特殊器台形埴輪と呼ぶ研究者もいます。つまり円筒埴輪も、もともととは特殊器台を象ったものだったのですが、

早いうちにその意味は忘れられて様式化してしまうので、形象埴輪とは別扱いをしています。そして古墳時代を通して圧倒的に多いのはこの円筒埴輪になります。ちなみに円筒埴輪の類型の中に朝顔形埴輪があります。これは特殊器台の上に特殊壺が載せられた状態を模したものが様式化したもので、古墳時代初期は壺を埴輪と同様な意味合いで並べる古墳もあります。

形象埴輪は、その名の通り何ものかをモデルに、それを象って作られた埴輪です。人物や動物、家、様々な器財（武器・武器、威儀具など）などが、古墳の祭祀や装飾のために立てられました。これらの形象埴輪は同時に作られ始めたわけではありません。古墳でのマツリの変化に従って、大きく見ると家や器財の埴輪と人物や動物の埴輪はその出現過程や意味が異なっているのです。

二 家形・器財形埴輪の出現

古墳時代が始まるのはおおむね三世紀半ばと考えられますが、初期には形象埴輪は使われていません。円筒埴輪（器台形埴輪や壺形埴輪含む）は、前方後円墳の円丘の中心に葬られた埋葬主体の直上に壇が築かれ、その上を囲んで四角く並べられます。埋葬主体とその上の空間を固く守るように圍繞されるのです。やがて古墳の頂上平坦面の周りや、段築の平坦面などにもめぐ

らされるようになります。大王墓級（二〇〇メートル以上）の前方後円墳で見ると、箸墓古墳、西殿塚古墳、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳、行燈山古墳（伝崇神陵）の時期まではこのような円筒埴輪の使い方が続きます。

そして四世紀中ごろの佐紀陵山古墳（伝日葉酢媛陵）の頃から変化が起きます。埋葬主体上部の方形壇にめぐらされる円筒埴輪の囲いの中に家形埴輪が置かれ、円筒埴輪の間に靫（ゆぎ）、楯、甲冑などの武器・武具や蓋（きぬがさ）、翳（さしば）などの威儀具が据えられるようになるのです。こうした埴輪を総称して器財形埴輪と呼びますが、円筒埴輪で囲みこむ行為が中心部を守る、あるいは隠すという機能が推測されますので、これらが邪悪なものが侵入することを防ぐような意味合いがあるものと思われます。また、古墳の頂上で行われる祭祀において参列者に被葬者の力を視覚的に表す効果もあったことでしょう。家形埴輪は円筒埴輪や器財形埴輪に囲まれた壇の中央に置かれるので、葬送に関わる儀式やマツリの中心的な建物を模したものと考えるのが自然です。このように出現当初の形象埴輪は、古墳の頂上で行われる祭祀に伴い、円筒埴輪と一体化した形で利用されたのです。そしてその出現が、大王墓級の前方後円墳が奈良盆地東南部から盆地の北部（佐紀盾列古墳群）に移動することと連動することも注目すべきことです。

三 水鳥、水の祭祀施設、舟の埴輪の出現

新たな形象埴輪の出現は四世紀末頃、主要な祭祀場所が墳頂から、古墳周囲の濠内の鳥状遺構や土橋のついた出鳥状遺構に移ることと連動しておきます。これらの遺構は近年、大型前方後円墳で発見されてきているもので、いずれも水をたたえた堀に接する部分には石が張られ、洲浜状に作られています。大阪府の古市古墳群にある津堂城山古墳は、河内に移った最初の大王墓とも目されている古墳ですが、鳥状遺構から水鳥形埴輪が出てきています。

同様の時期の奈良盆地西部、馬見古墳群に造られた巨大古墳である巢山古墳からは、前方部から突き出た出鳥状遺構に水鳥形埴輪が設置されていました。出鳥状遺構は斜面に石が貼られて洲浜に見たてられており、水鳥は洲浜の水際にあたる部分に立てられていたと考えられます。上面には柵形埴輪や盾形埴輪に囲まれた中に家形埴輪と蓋形埴輪を置き、中心に囲形埴輪とその中に特殊な家形埴輪が置かれたということです。囲形とは、他の埴輪の例や奈良県南郷大東遺跡で検出された遺構などからみて、水を使った祭祀施設（導水遺構）を囲う施設であることが分かっています。三重県の宝塚一号墳ではやはり石をめぐらせた造り出しから舟形埴輪が出土しており、このような施設は

水辺の景観を意識したものであることは間違いなさそうです。そのようなしつらえの中で、水を使ったマツリが埴輪を使って再現されたと考えられます。こうした島や出島のような特殊な祭祀空間は、前方後円墳のくびれ部や円墳、方墳の裾に取りつく造り出しとして定型化します。

四 人物、動物形埴輪の出現

一般に埴輪といえは、人物や動物を思い浮かべると思いますが、形象埴輪の中では最後に登場してきます。現在定型化した人物埴輪の最古例は、大王墓級でいえば大仙陵古墳（仁徳陵古墳）で、およそ五世紀半ばころと考えられます。巫女と考えられる女性の頭部（図1）と馬の頭部、鹿、水鳥が著名で、いずれも写実的で素晴らしいものです。これらがどこに置かれていたかは不明ですが、その後の今城塚古墳の成果などから、やがて古墳の別区や墳丘の外の外堤に立て並べられた可能性が高いと考えられています。

一方で地方でも大きな時間差なく人物や動物埴輪が広がっていったことも確認され、その中でも早い例として島根県松江市石屋古墳の例が参考になります。方墳の造り出しの一部が調査され、多彩な形象埴輪（図2）が出土しています。椅子に座る人物（首長か）、力士、武人、巫女らしき女性などの人物、馬



図1 巫女形埴輪頭部（宮内庁書陵部蔵）



図2 石屋古墳出土形象埴輪（松江市教育委員会蔵、島根県立古代出雲歴史博物館提供）



図3 鹿形埴輪（鳥根県教育委員会蔵，鳥根県立古代出雲歴史博物館提供）

具を装着した馬二体、家や、靴、盾、蓋などの器財形埴輪などが認められます。造形がよくわかる力士や馬などは極めて写実的な表現が認められ、それは石屋古墳に後続すると考えられる同市平所窯跡の「見返りの鹿」埴輪（図3）などにも継承されています。人物埴輪というと「踊る埴輪」のようにデフォルメされたものを思い起こす方も多いでしょうが、出現期の人物や動物の埴輪は写実性に富んだものでした。

前段階の水鳥や船、罌形（導水施設）埴輪が、祭儀の場の再現だったとするならば、人物や動物などの出現もそのシーンの再現であったといえるでしょう。その祭儀は葬送に関わるもの

であったと考えるのが自然ですが、その実態を知ることは難しい事です。ただ、埴輪の個別の分析や出土状況の分析から、殯（もがり）場の再現であるとする考え方も有力です。

その後、六世紀以降、形象埴輪樹立の約束事は薄れていき、段築の平坦面に円筒埴輪と一緒に並べられたり、横穴式石室の前に置かれたりと特別なマツリとの連動性は薄れていきます。また、特に東国で発展し、様々な形象埴輪が作られていくようになるのです。

五 『日本書紀』記載の伝承との関わり

形象埴輪の起源としては、『日本書紀』垂仁三十二年条に記された伝承が有名です。皇后日葉酢媛が亡くなった時、それまであった殉装の風習をなくしたいと垂仁天皇が言われた際に、野見宿禰（のみのすくね）という人物が土で人や馬などを象って作り、陵墓に立てて殉葬の代わりにすればよいと建言し、それが取り入れられた、というものです。野見宿禰は出雲の人で、出雲国の土部（はにべ）を使って作ったともあります。この伝承は、野見宿禰を祖先としている豪族、土師氏の始原を潤色するための記事という考え方が有力でした。また先に記したように円筒埴輪の起源が吉備地方の特殊器台が変化して出来上がったものということが考古学で論証されたため、埴輪の起源譚と

しては顧みられることはほとんどなくなっていたのです。

ただし、後者の考古学による埴輪の起源の解明は、円筒埴輪に関するものであり、書紀の記載は形象埴輪の始まりを記したものであることは注意が必要です。器財形埴輪を中心とした形象埴輪の始まりは、王墓級で見れば佐紀陵山古墳であり、それは日葉酢媛陵とされていることに注目する研究者もいます。

『日本書紀』の記述をそのまま信頼することは危険ですが、偶然の一致と一蹴してしまうのも乱暴でしょう。

さらに伝承では人や馬が具体例に挙げられていることが、野見宿禰が出雲出身とされることと併せて注目されます。人物埴輪の初期の例は前記したように大仙陵古墳で仁德天皇陵に充てられています。そしてそれとほぼ同時期に出雲の石屋古墳で造形上きわめて優秀な形象埴輪が導入されていることも前に述べた通りです。また『日本書紀』の仁德即位前記には出雲出身の淤宇宿禰（おうのすくね）という人物が、屯田司（みたのつかさ。天皇直轄の耕作地を管理する役人）として活躍する記事がみられます。こうしたことから五世紀半ばころに、出雲が倭王権と緊密な関係を築き、人物埴輪の祭祀をいち早く取り入れていたことは注目されます。埴輪創出伝承がそうしたことを背景に成立した可能性もあると思われます。

『日本書紀』は八世紀前半に国家の正史として編纂されたも

ので、その内容をそのまま事実として扱うことはできません。ただ近年、その記載内容が何もないところから創作されたものばかりではなく、何らかの歴史的事象を背景に伝承として記されたと考え、考古学の成果を援用する研究も増えてきました。史料批判の上に立って、古い時代の伝承を再評価する試みが進みつつあります。

おわりに

形象埴輪の出現時期について、という問いに対して複数の答えを用意することとなりました。ただ一般の多くの皆さんがイメージされる人物埴輪の起源、ということに絞れば、おおむね五世紀半ばという答えになると思います。一方で形象埴輪やそれが使われるマツリの画期を考えるうえできわめて重要になるのが、大王墓級の大型古墳でのありかたです。現在はそれらの多くが陵墓、もしくは陵墓参考地として立ち入りが許されていないため、資料に限界があることも付記しておきたいと思います。なお、参考文献はあまありませんが、比較的目にとめやすい重要な文献にとどめたことをお断りします。

参考文献

池淵俊一「淤宇宿禰・野見宿禰伝承と倭王権」（『季刊邪馬台国』）

一三三、二〇一七年

群馬町教育委員会編『保渡田八幡塚古墳』（群馬町教育委員会、二〇〇〇年）

一九六七

近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」（『考古学研究』一三一—三、二〇〇〇年）

一九六七

高橋克壽「形象埴輪と葬送祭祀」（『古墳時代の考古学』三、同成社、二〇一一年）

高橋克壽「埴輪」（『講座日本の考古学』八、古墳時代、下、青木書店、二〇一二年）

高橋克壽「人物埴輪の創出と古墳祭祀——王陵系埴輪のインパクト——」（『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター研究論集第一四集、島根県古代文化センター、二〇一五年）

椿真治「石屋古墳出土埴輪の復元整理作業報告」（『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター研究論集第一四集、島根県古代文化センター、二〇一五年）

穂積裕昌「いわゆる導水施設の性格について——殯所としての可能性の提起——」（『古代学研究』一六六、二〇〇四年）

穂積裕昌「船形埴輪と古代の喪葬——宝塚一号墳——」（シリーズ「遺跡を学ぶ」一一七、新泉社、二〇一七年）

森田克行「今城塚古墳と埴輪祭祀」（『東アジアの古代文化』一七、二〇〇三年）

若狭徹「もつと知りたいはにわの世界——古代社会からのメッセージ——」（『東京美術』二〇〇九年）

和田一之輔「形象埴輪の編年と画期」（『古墳時代の考古学』二、同成社、二〇一一年）

（にわの・ひろし／島根県教育庁参事）

アナウンサーが読む もういちど読む

山川倫理

小寺聡＝編

人類史上に登場した、おもな思想家たちの考えが把握でき、人類の精神史の全体像と、現代の倫理的課題が一望できる。2011年4月刊行の「もういちど読む山川倫理」を、元テレビ朝日アナウンサー河野明子さんが朗読したDVD-ROM付き。聞く教養書。

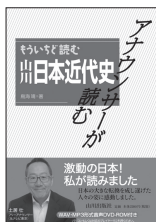


A5判 本体2,200円（税別） 304頁
ISBN：978-4-634-12004-4

山川日本近代史

鳥海靖＝著

国際社会のなかの日本という視野に立って、開国から太平洋戦争に至る歩みを叙述。2013年4月刊行の「もういちど読む山川日本近代史」を、フリーアナウンサー（元テレビ東京）の土居壮さんが朗読したDVD-ROM付き。聞く教養書。



A5判 本体2,200円（税別） 276頁
ISBN：978-4-634-12003-7